高等学校の進路指導における生徒の自己実現に必要な「生きる力」の育成について

高知県立宿毛高等学校　教諭　高月　琴
高知県教育委員会事務局高等学校課　指導主事　藤原　章弘

新学習指導要領は、学校教育において「生きる力」を育むことを基本理念としている。そこで、進路指導の中での「生きる力」の具体的要素として経済産業省の「社会人基礎力」という捉え方に着目した。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」とされており、高校生がこれからの社会を生きていく上で重要な力となると考える。本研究では、「枠組みにとらわれない自由な発想」とされるクリエイティブ・シンキングの思考法を基にして、課題解決を目指したグループワークを行うことが「社会人基礎力」の育成に有効であると考え、検証授業を実施した。授業の考察を基に、様々な活動との関係性を考慮しながら３年間の指導計画を考案した。
キーワード：生きる力、社会人基礎力、クリエイティブ・シンキング、グループワーク

1　はじめに

平成 22 年３月に告示された高等学校学習指導要領は、これまでに引き続き、学校教育において「生きる力」をはぐくむことを明示している。「生きる力」とは、「自ら課題を見つけ自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」と定義されている。変化の激しい社会における自己実現に必要な能力という観点から、「生きる力」の具体的要素を考えたとき、経済産業省の「社会人基礎力」という捉え方に着目することが有効だと考えた。「社会人基礎力」とは、職場や地域社会の中で多くの人と接触しながら仕事をしていくために必要な基礎的な能力のことで、「若者が社会に出るまでに身に付ける能力」と表現されている。３つの能力と 12 の能力要素に分類されており、主体性や実行力などの「前に踏み出す力（アクション）」、課題発見力や創造力などの「考え抜く力（シンキング）」、発信力や傾聴力などの「チームで働く力（チームワーク）」としている。Benesse 教育研究開発センターの「社員採用時の学力評価に関する調査」（2008 年９月）によると、企業が求める人材像は、社会人としての常識・マナーに加え、９割以上の企業がチームワーク力や問題解決能力、リーダーシップ力などの能力を挙げており、社会人基礎力の必要性がこの結果に裏付けられている。

社会において必要とされる能力を意識的に育成することは、高校生がこれからの社会を生きていくために必要な教育であり、進路指導の根幹となるものである。そこで、高等学校における進路指導の中での「生きる力」として、「社会人基礎力」の育成を中心に研究を進めることにした。

2　研究目的

進路指導として社会人基礎力の育成を考えたとき、育成のための手法が必要となる。そこで、「クリエイティブ・シンキング」の思考法に着目した。「クリエイティブ・シンキング」とは、「枠組みにとらわれない自由な発想」のことを指す。新しいものや考え方を生み出す際に有効とされる思考プロセスで、アイディアの「正しさ」を求めるのではなく「幅」を重視し、優劣をつけず楽しく行われることを理想とする。『創造的発想力を鍛える 20 のツールとヒント　クリエイティブ・シンキング』（ダイヤモンド社　2003 年）の著者である松林博文によると、この思考法を理解していれば、事実や過去のデータにとらわれず、伸び伸びと新しい視点で物事を見つめることができ、物事を考えるときに「わくわく感」を感じたり、「何かを生み出そうとする精神」が養われたりするとされている。アイディア

の正誤にこだわらず、自由に意見を述べたり、それを受け入れたりする姿勢は、考えることや学ぶことへの意欲を高めることができ、能力の育成に効果的であると考える。

そこで、本研究の目的は、進路指導として社会人基礎力の育成を目指した進路指導計画を作成し、効果的であると考えられる「クリエイティブ・シンキング」の思考法を用いた授業を行い、その有効性について、生徒の変容を分析し考察することとし、以下のような研究仮説を設定した。

高等学校における計画的・段階的な進路指導の中で、「クリエイティブ・シンキング」の思考法を基にしたグループワークを体験させることによって、社会人基礎力が育成される。

3　研究内容

(1)　基礎研究

ア　経済産業省の社会人基礎力について

３つの能力と 12 の能力要素に分類されている社会人基礎力（表１）は、『社会人基礎力　育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために』(経済産業省　2010) において、「『人と人との関係の中でしか人間は育たない』というところに再度注目し、スポットを当てるべくして出てきたもの」と述べられており、チームを組んで課題に取り組むことが、社会人基礎力の育成に効果的であるとされている。高等学校においてそのような取組を実践することで、他者と関わる際に必要な姿勢を学ぶことができたり、何事にも意欲的に取り組む態度が育成されたりなど、様々な場面においてその力を発揮することができると考える。また社会人基礎力は、将来社会で必要な能力の一分野として位置付けられており、人間性や基本的な生活習慣が基盤となって、他の能力と相互に作用し合いながら様々な体験等を通じて循環的に成長していくものである（図２）。そのため、生徒の成長段階や学校の現状把握、学校全体での共通理解のもと実践することが求められる。

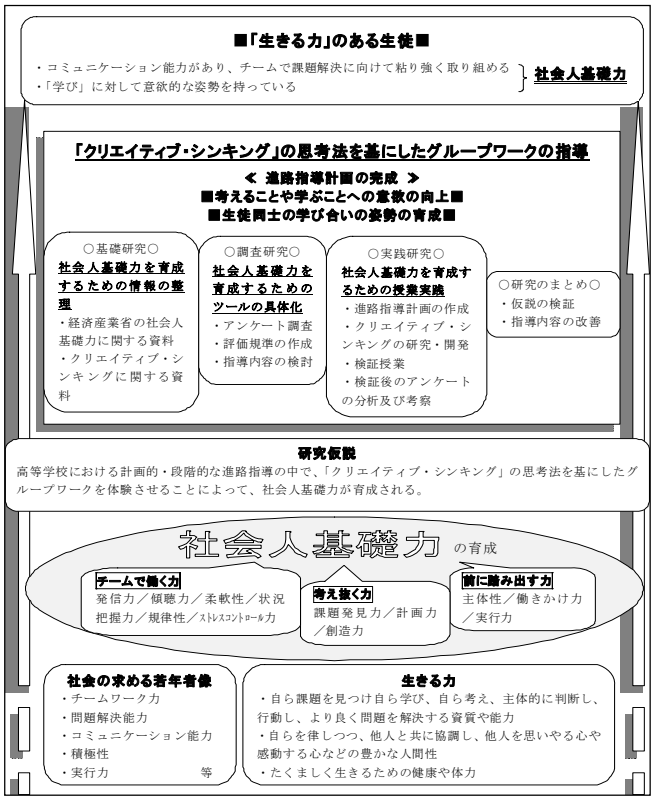


図1　研究構想図

表1　社会人基礎力の3つの能力と 12 の能力要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力（アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力	ストレスの発生源に対応する力

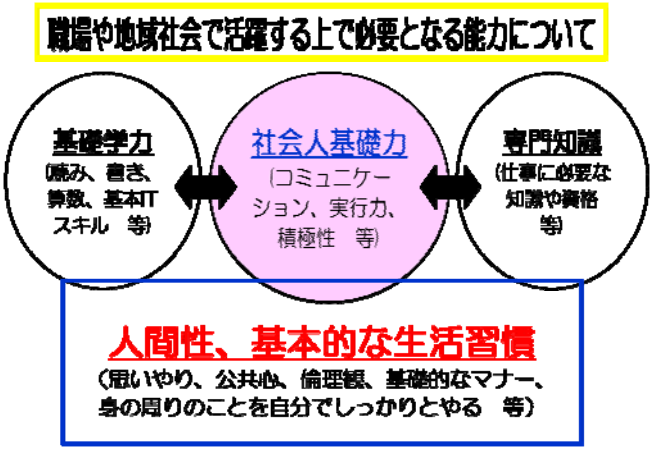


図2　能力の全体像

（経済産業省「社会人基礎力に関する研究会―『中間取りまとめ』―」2006）

イ　クリエイティブ・シンキングについて

(ｱ)　クリエイティブ・シンキングの思考法を促進する手法

クリエイティブ・シンキングの思考法を基盤として社会人基礎力の育成を図るに当たり、具体的な発想の進め方として、松林博文の著書である『創造的発想力を鍛える 20 のヒント　クリエイティブ・シンキング』(ダイヤモンド社　2003)に示されている以下の２つの手法に注目した。これらの手法は、チームでアイディア出しをするときに有効とされている。何事も否定されない自由な雰囲気の中で他者と共に思考することで、「考える」ことに対して楽しさやおもしろさを感じることができたり、他者の発言をきっかけに、今まで思いつかなかったようなアイディアが生み出されたりすると言われている。グループワークによる社会人基礎力の育成を目指す上で、有効な手法であると考える。

ブレーンストーミング

ブレーン（Brain）とストーム（Storm）からきた造語で、「脳を嵐のように激しく働かせる」といった意味合いがあると言われている。創造的発想法の基本で、チームの対話の中でアイディア出しを行う。「共に創りだす感覚」を持つことができ、楽しみながらどんどん意見を出すことで、発想の相乗効果が得られるのが特徴である。

ブレーンライティング

アイディアを紙に書き出す方法で、1970 年代にドイツで始められたと言われる。同時に複数のアイディアが集められることや、声に出さずアイディアを主張できることから、内気な人でも参加しやすいとされている。

(ｲ)　高大連携授業「クリエイティブ・シンキング」の参観

クリエイティブ・シンキングの思考法を土台として社会人基礎力の育成を図っているのが、高知県立高知西高等学校と高知大学が共に研究・開発を行ってきた高大連携授業「クリエイティブ・シンキング」である。この授業は、高知県教育委員会と高知大学による高大連携教育実行委員会によって設置された８日間のプログラムである。高知大学教育研究部人文社会科学系上田健作教授によると、本プログラムは主として、学ぶ意欲の向上、主体的学びの姿勢の形成、粘り強く考える力の向上の３点を目標としており、『高大連携による総合学習プログラムの開発―自律創造型総合学習プログラムの開発―　研究成果報告書』(2010 年）の中で、「授業は、学ぶ楽しさ、自ら学ぶ姿勢、関連性や論理性などに対しての理解を深める『気づき段階』（３日間)、何が課題であるかを探究し、課題解決への道筋を考える『課題探究段階』（３日間)、目標の到達度を分析し、チーム活動の意義を振り返る『成果分析段階』（２日間）で構成される。」としている。「成果分析段階」ではチームによってプレゼンテーションを行い、その後、報告小論文の作成が行われる。チームによってすべての活動が行われ、教員主導ではなく、生徒同士の学び合いの姿勢を育てるという視点が徹底された取組内容となっている。それらが、生徒の「教わる」姿勢から「学ぶ」姿勢への変化をもたらし、主体性やチームワーク力、問題解決能力などを高める鍵となっていると考える。先に引用した研究成果報告書のデータによると、このプログラムに参加し授業評価を行った過去３年間の生徒の７～８割以上が、「考え抜く力」「行動力」「創造性」の能力が「向上した」と回答している。これらの結果から、８日間の本プログラムにおける理念や学習形態は、社会人基礎力の育成に効果があり、３年間の高校生活において段階的に行うことで、さらに能力の向上・定着が期待できると判断した。

(2)　調査研究

社会人基礎力ルーブリックの作成（表２）

社会人基礎力の評価を行うにあたって、経済産業省の『今日から始める社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す！～』（角川学芸出版　2008）にある「社会人基礎力レベル評価規準表」を参考にして能力が発揮できた例を考え、３段階で評価できるルーブリックを作成した。対象生徒が実際にとった行動や成果と照らし合わせ、各能力要素のレベルを判断することができる。

表2　社会人基礎力ルーブリック

3つの力	12の要素	定義	A （十分発揮できた）	B （発揮できた）	C （発揮できなかった）
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力	自分のすべきことを見極め、困難な事柄にも自信を持って取り組むことができる	自分なりに判断し、前向きに行動できる	自分のすべきことが分からないため物事に取り組めない、取り組む意欲がない
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	状況に応じて相手が納得できる説明をし、理解を得たうえで、周囲の人を動かすことができる	相手が納得できるよう熱意を持って協力することの必然性を伝えることができる	自分自身が状況を理解できていないため他人に働きかけることができない、働きかけようとしない
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	強い意志のもと、小さな成果に喜びを感じながら、目標達成に向けて粘り強く取り組み続けることができる	前向きな気持ちで取り組み続けることができる	目的が明確でないため行動できない、目的を持たず実行する意欲がない
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	現状を把握して積極的に情報収集や分析を行い、課題を明らかにできる	課題を明らかにするため、現状を把握し、意欲的に情報収集や分析を行うことができる	課題が何なのか分からず明確にできない、明らかにしようとしない
	計画力	課題の解決に向けプロセスを明らかにし準備する力	課題解決に向けての手だてを効率よく計画でき、事態に合わせて柔軟に計画を修正できる	課題解決に向けての手だてを計画して着実に実行できる	どのような手順を踏めば課題解決に向かうか分からず計画できない、課題解決に向けて努力しようとしない
	創造力	新しい価値を生み出す力	様々な視点から物事を見つめ、組み合わせるなどして新しいものを作り出すことができる	新しいものを作り出すことを常に意識しながら、そのためのヒントを意欲的に探すことができる	どのように考えれば新しい価値を生み出せるか分からない、新しいものを作り出そうとしない
チームで働く力	発信力	自分の意見を分かりやすく伝える力	自分の考えを、例を用いたり理由を述べたりしながら具体的に伝えることができる	話そうとすることを自分なりに理解しており、積極的に伝えることができる	自分の考えを整理できず人に伝えられない、考えたり述べたりする意欲がない
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	人の意見を、相槌を打ったり質問や投げかけをしたりして、引きだしながら聴き、正確に理解することができる	人の意見を素直に聴き入れて理解することができる、理解しようとする態度がある	人の意見を理解できない、人の意見を聴く態度がみられない
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	自分の意見を持ちながら、相手の背景や事情を理解し、異なる意見も共感を持って受け入れることができる	自分の意見を持ちながらも、相手の意見に理解を示すことがきできる	人の意見や立場の違いが理解できない、受け入れようとしない
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	自分にできること、他人ができることを的確に判断し、状況に配慮しながら行動できる	自分の役割を理解し、意欲的に行動できる	自分の置かれている状況を理解できない、現状について考えようとしない
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	ルールやマナーを理解しており、周囲に注意を促したりしながら行動できる	ルールやマナーを理解しており、周囲に迷惑をかけないよう行動できる	ルールやマナーを理解していない、守ろうとしない
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスの原因を見つけ、その対処法を考えて取り除くことができる	ストレスの原因を見つけ、解消できるよう色々な方法を試すことができる	ストレスの原因に向き合わず対処できずにいる

４　実践研究

(1)　進路指導計画の作成

社会人基礎力の育成を目指し、クリエイティブ・シンキングの思考法を基にしたグループワークによる高等学校３年間の指導計画（表３）を作成した。この思考法を基に、生徒の主体性を重視したグループワークを行えば、生徒同士の学び合いの姿勢が育成され、他者とともに協働することの意義を学ぶことができると考える。そのチーム力を生かして、様々なアイディアを出し合いながら共に思考を深め、「チームとしての答え」を求めていく活動を繰り返し行えば、社会人基礎力の育成に効果があると考える。

各単元においては、育成したい能力を特定して活動を繰り返し行うことで、その能力の向上を図りたいと考える。授業はホームルーム活動の時間を利用し、２、３時間で一つの単元となるよう設定している。この指導計画を実践することで、高等学校学習指導要領に明記されているホームルー

ム活動の時間の目標である「ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」、及び活動内容の一部である「ホームルーム内の組織作りと自主的な活動」「自己及び他者の個性の理解と尊重」「コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立」「学ぶことと働くことの意義の理解」の達成に、効果があると考える。

第１学年においては（表４）、まず、社会人基礎力における「チームで働く力」の育成を主として目指している。新しい生活のスタートを切る１年次から、グループワークによって、他者とともに協働していく力を継続的・系統的に育成し、定着させていきたいと考える。また、本研究は、グループワークによる社会人基礎力の育成を目標としているため、「チームで働く力」の育成は３年間の指導における土台となると考え、１年次での育成を目指した。第２学年においては、問題意識を持ち、その課題を解決するための方法やプロセスを考え抜くのに必要な「考え抜く力」、第３学年では、「一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力」とされている「前に踏み出す力」の育成を重点目標とし、活動を計画している。

なお、社会人基礎力は本来、授業や学校行事など日常生活のすべてを通じて徐々に育成されるものである。そこで指導計画は、生徒の発達段階や学校行事などとの関連性にも配慮する必要がある。３年間を通じて社会人基礎力の育成を目指した総合的な指導の中で、生徒が自己理解、他者理解を深め、人と関わり合いながら社会に関心を持って課題に粘り強く向き合う姿勢、自己の将来の目標を持ち、実現に向けて前向きに努力できる生徒を育成したいと考える。

表3　3年間の指導計画

	1年	2年	3年
	社会人基礎力に基づいた重点的に育成したい能力		
	主として 「チームで働く力」	主として 「考え抜く力」	主として 「一歩踏み出す力」
テーマ	「理解する」 自己理解・他者理解を通じて、コミュニケーション能力を育成し、「協働すること」の意義を理解できる生徒を育む。	「思考する」 社会問題などに目を向ける。課題を発見・追究し、論理的に思考した結果を他者に表現するという活動を通じ、主体的思考力や表現力、社会性を育む。	「前進する」 社会への参画と共生を図りながら、理想を持って将来に向かう生徒を育む。
4～5月	コミュニケーションを深めるⅠ	問題の本質を見極めるⅠ	自己発展を目指すⅠ
6～7月	コミュニケーションを深めるⅡ	問題の本質を見極めるⅡ	自己発展を目指すⅡ
9～11月	伝え合うⅠ	課題解決学習Ⅰ	自己発展を目指すⅢ
1～2月	伝え合うⅡ	課題解決学習Ⅱ	

表4　1年次の年間指導計画

回数	時期	単元	ねらい	学習内容	特に重視する能力要素
1 2 3	４～５月	コミュニケーションを深めるⅠ ［３時間］	・仲間作りを促進し、コミュニケーションを図ることのできる人間関係を構築する。 ・学習活動に興味・関心を持ち、意欲的に取り組む姿勢を身に付ける。	・自己紹介（マインドマップ） ・ブロックゲーム① ・ブレーンライティング ・協力ゲーム① ・振り返り	発信力 傾聴力
4 5 6	６～７月	コミュニケーションを深めるⅡ ［３時間］	・仲間との交流の中で、自分や他者について知ることで、人間関係をより深める。 ・自分の考えを表現する力や、他者の考えを受け入れる姿勢を育成する。	・ブロックゲーム② ・ブレーンストーミング ・協力ゲーム② ・振り返り	発信力 傾聴力
7 8 9	９～11月	伝え合うⅠ （チーム力の育成） ［３時間］	・他者と協力して物事をなす力を育成する。 ・異なる他者の考えを受け入れて理解したうえで、状況に配慮しながら行動する姿勢を育成する。	・課題解決学習〈～地域を知ろう～旅プラン作成〉（アフィニティ・ダイヤグラム） ・プレゼンテーション ・振り返り	柔軟性 状況把握力
10 11	１～２月	伝え合うⅡ （チーム力の育成） ［２時間］	・他者の考えを理解し、相手の感情に配慮した上で行動できる態度を育成する。 ・状況に応じて自分の感情をコントロールしながら他者とともに物事をなす力を育成する。	・貿易ゲーム ・振り返り	規律性 ストレスコントロール力

(2)　検証授業の概要（A高等学校　第１学年 36 名　平成 22 年 11 月　全３時間実施）

ア　単元名　「グループワークでチーム力を育てる」

イ　単元のねらいと授業の構成（図３）

本単元は、社会人基礎力の「チームで働く力」の中の発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力の４つの能力要素の育成を目指し作成した１年次の指導計画の「コミュニケーションを深めるⅠ」から１時間、「伝え合うⅠ」から２時間を取り出して構成した。この構成で指導を行えば、生徒同士のコミュニケーションが深まったうえでグループワークを行うことができるため、効果的に能力の育成を図ることができ、効果の検証ができると考えたからである。

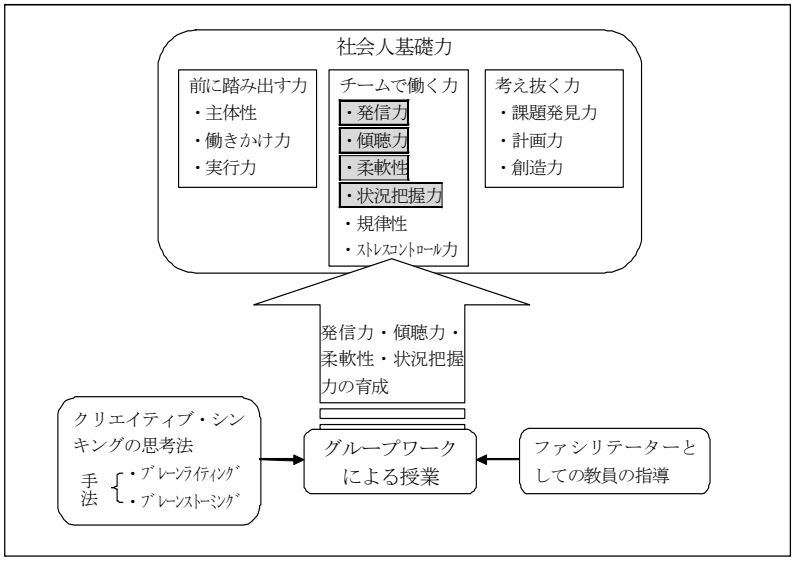


図3　検証授業の構想図

全体の活動の流れとしては、まず、チームのコミュニケーションを深め、クリエイティブ・シンキングの手法を利用して柔軟な発想力を促す活動を行う。そのうえで、与えられた課題について意見を出し合ってチームとしての結論を出し、プレゼンテーションを行う、というものである。各時間の最後には活動の振り返りを行い、他者との関わりや自分自身の言動を見つめ直す。一つ

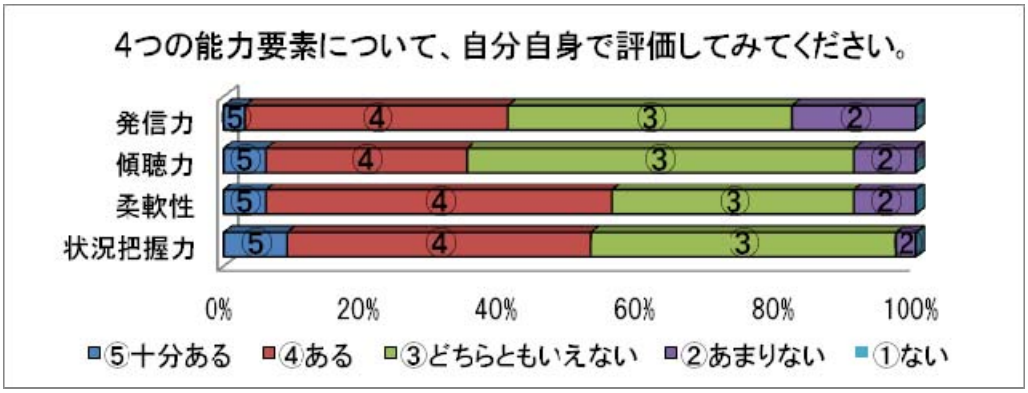
の課題に対して幅広いアイディアを出し合いながら「チームとしての解答」を求めていく過程で、コミュニケーションの在り方を学び、チームを機能させるのに必要な合意形成に至るためのプロセスを体験できる。また、自分は何をするべきか、自分にできることは何か、などを考えるなかで、小集団における自分の役割や特性を学ぶことができると考える。教員は、生徒やチームの主体性を重要視し、生徒自身の「気づき」を促すファシリテーター（促進者）として授業を行う。生徒同士で互いに学び合うことが、チーム力の育成を促進すると考えたからである。

ウ　検証授業前の能力に関する調査結果

(ｱ)　４つの能力要素（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）の自己評価について

社会人基礎力の「チームで働く力」に含まれる４つの能力要素（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）について、生徒が自己評価を行った。評価は、以下のように、本研究において作成した上記の社会人基礎力ルーブリックのＡ段階とされる状態に対して、５段階の選択肢（「十分ある」を５、「ない」を１とする５段階評価）で回答させることとした。

グラフ１を見てみると、４つの能力要素ともに「どちらともいえない」と回答した生徒が多いことが分かる。これらの能力要素を日頃意識することがあまりなく、判断がしづらいことが理由の一つではないかと考える。そのため、授業を行う際、これらの能力要素を十分意識させるよう、どの能力要素の育成を目指した活動かなど、繰り返し説明する必要がある。傾聴力は、「十分ある」または「ある」と回答した生徒が 35%と最も少なかった。発信力については、「あまりない」と回答した生徒が最も多く、18%を占めた。検証授業では、クリエイティブ・シンキングの思考法を取り入れ、チーム全員が、誰からも否定されることのない雰囲気の中で自由に発言し、どんな意見も肯定的に受け入れることを基本として活動を行う。授業実施後の調査にどのような変化があるか注目したい。「ない」と答えた生徒は、４つの能力とも０人だった。



グラフ1　集計結果（全体の割合）

(ｲ)　心理尺度 KiSS-18 について

心理尺度「KiSS-18（Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版）」は、菊地章夫（1988）によって作成された、社会的スキルを身に付けている程度を測定できる尺度である。社会的スキルとは、本尺度において「対人関係を円滑にするために役立つ技能」と定義されている。Goldstein,Sprafkin,Gershaw&Klein (1980) によって作成された「若者のための社会的スキル」のリストを基に作成されており、中学生程度から社会人まで、広い対象に実施可能とされている。18 項目の設問（各設問項目は「いつもそうだ」５点、「いつもそうでない」１点の５段階評価）からなり、全項目の合計点を算出するものである。合計得点が高ければ、社会的スキルに関して自己評価が高いということを示す。

菊地（1988）によってすでに実施されている調査において、高校生男子（106 名）の平均が

53.98 点、高校生女子（57 名）の平均が 53.47 点である。以下の結果（表５）からは、本検証授業を実施する生徒のほうが、自身の社会的スキルに関して高い評価をしていると言える。設問ごとの平均値（表６）については、全体的に中程度の結果となっているが、なかでも設問８と設問 11 の平均値が低くなっており、他者との間に問題が生じた場合の対応について自信のなさが感じられる。

表5 合計得点の平均値

	授業実施前 (10/26)
合計得点の平均値	60.75 男子 61.33 女子 60.33
標準偏差 (SD)	10.76

表6 設問ごとの平均値

	設問内容	授業前
1	他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	3.65
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	3.46
3	他人を助けることを、上手にやれますか。	3.49
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.35
5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	3.38
6	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	3.22
7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	3.19
8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	3.03
9	仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	3.43
10	他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	3.32
11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	3.11
12	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	3.24
13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.70
14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	3.22
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	3.24
16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	3.97
17	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。	3.59
18	仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか。	3.32

エ　授業の展開

第一時

○ブレーンライティング【クリエイティブ・シンキングを促進する手法】（写真１）

・与えたテーマについて浮かんだアイディアを紙に書き出していく手法である。柔軟な発想力と、人のアイディアを肯定的に受け入れる態度が必要である。最後にチームで一押しのユニークなアイディアを選び、各チームの代表者が発表することで、クラス全体でアイディアを共有した。

○ブロックゲーム

・別室に用意している不規則に積み重ねられたブロックを見て覚え、全く同じものを時間内にチームで作成する取組である。終了後、作品の完成度を競う。チームで協力し、「伝え合う」ことの重要性を学ぶ。最後に、作品の採点を行った。

○振り返り

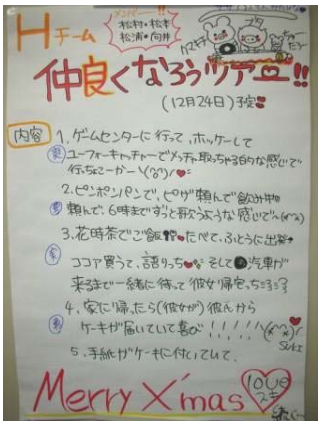
・振り返りシートによって、他者の良いところを見つけたり、自身の言動を振り返ったりする。

写真1 ブレーンライティングを実践している様子

生徒の様子・変化について

・楽しい雰囲気の中、生徒同士の会話が自然に増え、協力して活動に取り組めていた。

・個性あるアイディアに価値を感じ始めている生徒がいた。

第二時	○ブレーンストーミング【クリエイティブ・シンキングを促進する手法】（写真２） ・チームの対話の中でアイディア出しを行う。「共に創りだす感覚」を持つことができ、楽しく自由な雰囲気の中どんどん意見を出すことで、発想の相乗効果が得られるのが特徴である。最後にチームで一押しのユニークなアイディアを選び、各チームの代表者が発表することで、クラス全体でアイディアを共有した。 ○Ａ市・Ｂ町旅プラン作成 ・チームでオリジナルの旅プランを考案する取組で、まず計画書を作成した。「正解」のない事柄に対して自由に発言したり、人の意見を肯定的に聴き入れたりしながら、チームで協力し課題を達成することの楽しさや大変さを体験する。 ○振り返り ・振り返りシートによって、他者の良いところを見つけたり、自身の言動を振り返ったりする。 写真2 ブレーンストーミングによって出されたアイディアの例 **生徒の様子・変化について** ・多くの生徒が、楽しみながら伸び伸びと意見を述べている様子が見られた。 ・発表を聴く姿勢などから、他者の持つ意見に興味を持って聴けている生徒が前時より多く感じられた。 ・他者と協働することの大変さを学ぶことができたり、思考を深めることのできたりする時間となった。
第三時	○プレゼンテーション用ポスター作成（写真３） ・前時に作成した計画書を基にポスターを作成する。チームで出した結論をまとめることで、「チームの作品」であることの意識を高める。また、分かりやすく他者に伝えるための表現力を養う。 ○プレゼンテーション ・チームでまとめた内容を協力して発表することで、他者と共に課題を達成することの楽しさや、人に伝えることの楽しさ、難しさを体験する。他チームの発表を聴くことで、考え方や着眼点の違いを知る。 ○振り返り ・振り返りシートによって３時間の授業を振り返りながら、グループワークの意義を考える。  写真3 生徒の作成したポスターの例 **生徒の様子・変化について** ・色遣いや文字の大きさなど、チーム内で確認し合う様子がよく見られ、全員で考えを共有しようという態度が感じられた。 ・他者に伝えることの楽しさや大変さを感じ取ることのできた生徒が多くいた。 ・他者のアイディアを、新しい視点として肯定的に受け入れることができている様子だった。

(3)　検証授業の分析と考察

ア　社会人基礎力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）の育成を目指したクリエイティブ・シンキングの手法の有効性について

クリエイティブ・シンキングの思考法を促す手法であるブレーンライティングとブレーンストーミングを実践し、社会人基礎力の中の４つの能力要素の効果的な育成を目指した。授業中は、クリエイティブ・シンキングの思考法の基本である、どんなアイディアにも正誤や優劣をつけず楽しみながら思考するこ

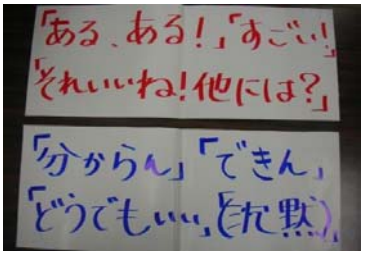


写真4 OKワードとNGワードの例

とや、「正しさ」や「普通さ」を求めず新しく個性的な発想をすることの大切さなどを説明した。より具体的に意識付けをするために、他者のアイディアを聴いた時の肯定的な発言と否定的な発言の例を「ＯＫワード」と「ＮＧワード」として提示するなどした。（写真４）

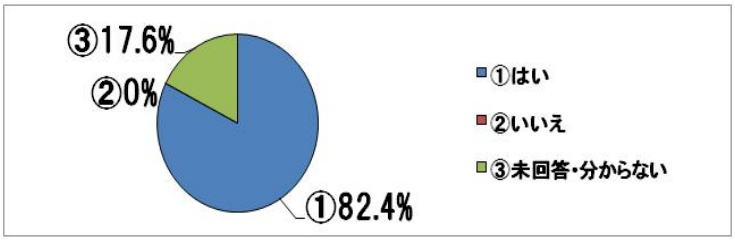
(ｱ)　アンケート結果からの考察

ブレーンライティングとブレーンストーミングの２つの手法は、チーム一人一人の意見が必ず必要となるため、思考を深めたり、チームのコミュニケーションを図ったりする頻度は高まる。これらの手法を体験した生徒の感想やアンケートには、「みんなで話し合うことができるようになった」「他人の意見を受け入れられるようになった」「いっぱいおもしろい意見が出た」などが多くあった。自分の考えを述べること、他者のアイディアを聴くこと、自由に発想することに、喜びやおもしろさを感じたことが分かる。どんな意見も認められるクリエイティブ・シンキングの思考法を進めるために、個々の意見を欠かすことのできない手法を利用したことで、「自分の考えを言うのは恥ずかしい」「間違ったことを言いたくない」などといった感情が薄れたのではないかと考える。

また、「今回の授業のような活動を継続して行うことは、４つの能力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）の育成に効果があると思いますか」という設問に対しても、80%以上の生徒が「はい」と回答した（グラフ２）。これらのことから、クリエイティブ・シンキングの思考法を促すための手法を取り入れることは、４つの能力要素の育成に有効であったと考える。

【アンケート結果】

設問：今回の授業のような活動を継続して行うことは、４つの能力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）の育成に効果があると思いますか。（グラフ２）



グラフ2　設問に対する回答の割合

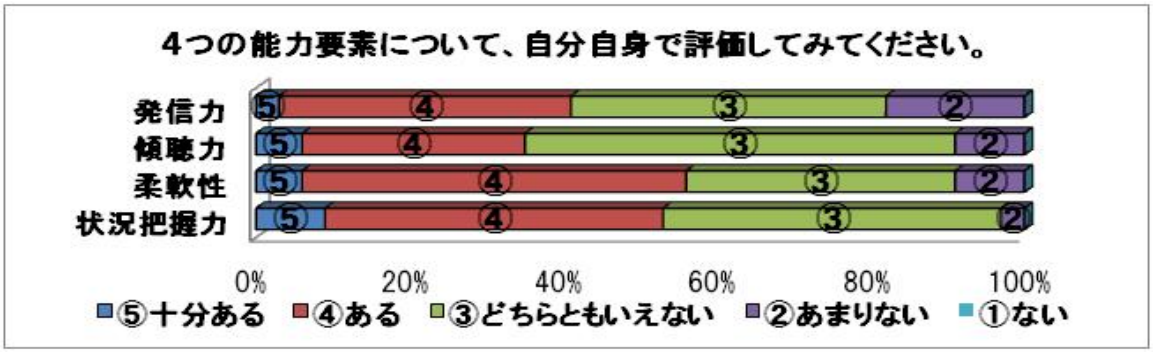
理由として「そんなに緊張せずに意見を聴いたり言ったりして、考えが聞けるから」「楽しく話し合えるから」「コミュニケーションが取れるから」「人と接しながら育つものだから」などがあった。

(ｲ)　４つの能力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）に関する自己評価

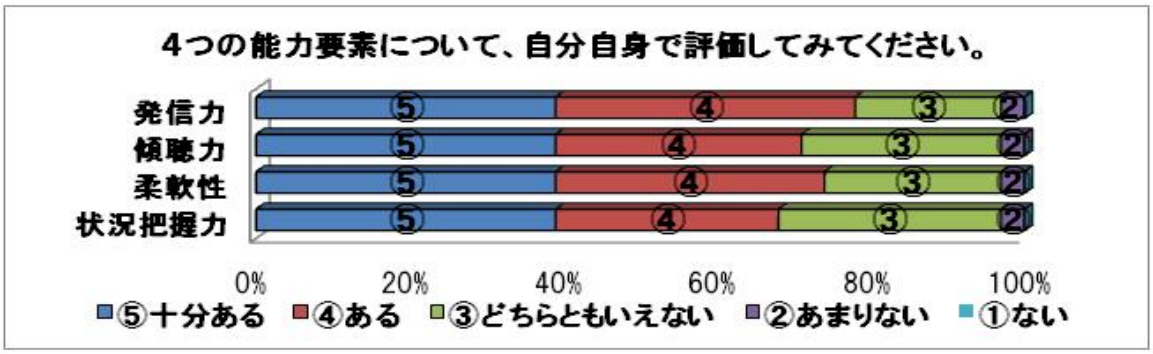
社会人基礎力の「チームで働く力」に含まれる４つの能力要素（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力）について、生徒が検証授業前と検証授業後に自己評価（「十分ある」が５、「ない」を１とする５段階評価）を行った。

その結果を比較したところ、授業後、４つすべての能力において「十分ある」と回答した割合が大幅に向上した（グラフ３）。特に発信力と傾聴力については、「十分ある」または「ある」と回答した割合が、30%以上増加した。個々の考えを認め合う体験をしたことや、各能力について意識しながら活動を行ったことによる結果であると考える。「ない」と回答した生徒は、検証授業前、検証授業後共に０％だった。

検証授業前



検証授業後



グラフ3　集計結果（全体の割合の比較）

イ　グループワークによる取組、ファシリテーターとしての教員の指導の有効性について

本検証授業では、一人一人の意見が重要となってくる１チーム３、４人という少人数によるグループワークによって、課題解決を目的とした活動を行った。

教員は、ファシリテーターとして授業を進行した。ファシリテーターとは「促進者」のことであり、個々の持つ意見や感情、個性などを引き出し、生徒自身の「気付き」を促す存在である。教員の考える「答え」に導いたりするような助言はせず、生徒が主体的に考えを深められるような関わり方をする必要があるため、生徒に対して助言をすべき状況であるか、見守るべき状況であるかを適切に判断しなければならない。また、生徒が思考を深めやすい雰囲気や環境を作ることも、役割の一つである。

(ｱ)　アンケート結果からの考察

グループワークを行う際は、メンバー同士で話し合いを重ね、自分の考えを整理して他者に伝えたり、違う考えを持つ他者を受け入れて理解したりする力が必要となってくる。その過程においては、話し合いが行き詰まったり、チームのまとまりがなくなってきたりなどの問題が生じることはよくあるが、それでも互いに認め合い、チームなりの一つの答えを求めていく活動を繰り返すことで、チーム力は少しずつ育成されると考える。さらに、そういった活動を繰り返していくなかで、徐々に自分の個性や適性も知るようになり、チームにおける自分の役割を知ることができると考える。

以下のアンケート結果からは、本検証授業において、それぞれの生徒が先に述べたような事柄を体験しながら、他者と協働することの楽しさや難しさを学び、グループワーク活動について改めて考える機会となったことが分かる。

また、教員がファシリテーターとして授業を進めたことで、生徒同士がコミュニケーションを図りながら活動する時間が多くなり、話し合いをより深めることができた。そのことも、以下のような感想を持つことに影響したと考える。

本検証授業において、少人数によるグループワークですべての取組を行い、教員がファシリ

テーターとして授業を進めたことは適切であったと考える。

【アンケート結果】

設問：他の人と一緒に新しいものを創り出すことについてどのように思いますか。

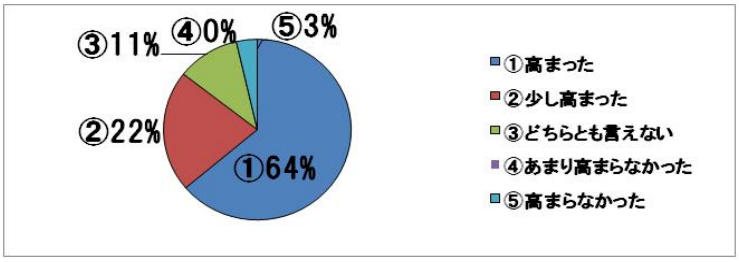
楽しい…「皆で協力できるから」「いろんな意見が出ておもしろいから」「話し合う中で、仲良くなったり、笑ったりできるから」「あまり話をしない子と話ができるようになったから」「やりがいがある」など

大変　…「一人ひとりの意見があるので、まとまらなかったりするから」「考えていることを言うのは難しいから」「(考えて形にする) 時間が必要」「案が出ないといきづまるから」など

設問：コミュニケーションを深めるには何が大切だと思いますか。

「協力して一つのものを作ること」「意見を言って、聞いてあげること」「みんなで協力して話すこと」「積極性」など

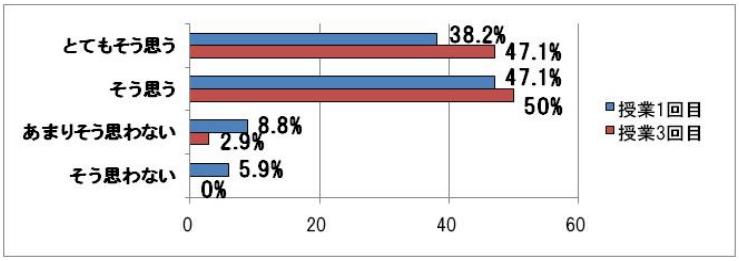
設問：３時間の活動を振り返って、チーム力は高まったと思いますか。(グラフ４)



グラフ4　設問に対する回答の割合

理由として「だんだん協力できたから」「みんなが明るくなったから」「あまり話したことのない人とも、けっこう話したから」「意見が言えたから」などがあった。

設問：この授業は、あなた自身の役に立つと思いますか。(グラフ５)



グラフ5　設問に対する回答の割合

「とてもそう思う」と回答した生徒が、１回目の授業後に比べ３回目の授業後に 8.9%増加、「そう思う」と回答した生徒も 2.9%増加した。また、「そう思わない」と回答した生徒は、３回目の授業後には０％となった。

(ｲ)　心理尺度 KiSS-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版) からの考察

「対人関係を円滑にするために役立つ技能」と定義されている社会的スキルを測ることのできる心理尺度 KiSS-18 を検証授業前と検証授業後に実施し比較したところ、授業実施後、自身に対する評価のクラス平均値がさらに高くなった。(表７)

また、設問ごとの平均値を見てみると (表８)、検証授業前には特に評価が低かった設問８と設問 11 が、大きく向上した。これは、授業の初めに、どんな意見も否定されず、楽しみながら自由に伸び伸びと思考することが基本であるグループワークによって、クリエイティブ・シンキングの手法を取り入れて取組を行ったことが影響したのではないかと考える。自分の意見を他者に伝え、他者の意見を１つのアイディアとして受け入れる。そして、チームとしての「答え」を求めて話し合いを深め、最後に発表するという一連の流れを体験するなかで、他者と協働する際に必要な姿勢を少しずつ学び始めたのではないかと考える。

表7　全体の合計得点の平均値の比較

	授業前（10/26）	授業後（11/16）
調査人数	36	33
合計得点の平均値	60.75 （男子　61.33 女子　60.33）	72.4 （男子　71.9 女子　72.8）

菊地（1988）の作成した尺度得点の平均値
（高校生男子 53.98
高校生女子 53.47）

表8　設問ごとの平均値の比較

設問内容	授業前	授業後	得点差
1　他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	3.65	4.07	0.42
2　他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	3.46	3.93	0.47
3　他人を助けることを、上手にやれますか。	3.49	4.07	0.58
4　相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.35	4.0	0.65
5　知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	3.38	3.87	0.49
6　まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	3.22	3.87	0.65
7　こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	3.19	3.87	0.68
8　気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	3.03	3.87	0.84
9　仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	3.43	4.03	0.6
10　他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	3.32	4.07	0.74
11　相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	3.11	3.97	0.86
12　仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	3.24	4.1	0.86
13　自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.70	4.17	0.46
14　あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	3.22	3.97	0.75
15　初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	3.24	4.03	0.79
16　何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	3.97	4.2	0.23
17　まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。	3.59	4.17	0.57
18　仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか。	3.32	4.2	0.88

(ｳ)　個の変容

個の変容をとらえるため、事前調査として行った４つの能力に対する自己評価と心理尺度 KiSS-18 の結果が共に低かった生徒Ａに注目した。様子を観察してみると、明るく元気な生徒であるが、人の考えを聞いたりしながら、他者と一緒にじっくり物事を進めていくことが少し苦手であるように感じられた。例えば、ブレーンストーミングの際、自分のアイディアが浮かばなくなると、他のチームの生徒と話したり、チームのアイディアが書き込まれたワークシートを持って、「先生、これほとんど自分が考えたがで！」と言ったり、アイディアが浮かばなくなると、他チームの生徒と話し始める、といったことがあった。

そこで、生徒Ａのチームの話し合いにファシリテーターとして関わり、「どうしたらみんなが意見を出しやすくなると思う？」という問いかけや、「こんな方向で考えてみたらどう？」などの提案、生徒の発言には「いいね、みんなはどう思う？」など、生徒の主体性を尊重し、自由に発言ができる雰囲気作りを心がけた。

すると生徒Ａは、自分の方に向けていたワークシートを、メンバーの見やすい方向に向きを変えたり、メンバーの提案に対して、言葉で同意を示したりするようになった。些細なことではあるが、こういった行動を繰り返すことで、生徒Ａの他者と協働する力は育成されていくと考える。

検証授業後の、生徒Ａの４つの能力要素に関する自己評価と心理尺度 KiSS-18 の結果は、検証授業前に比べて、それぞれ以下のように向上（表９、表 10）した。チームのメンバーとのコ

ミュニケーションの中で、生徒Ａが自ら考え、行動することを促した結果が、このような評価につながったと考える。教員主導ではなく、生徒の主体性を重視するファシリテーターとしての役割は、他者と関わる能力の育成に重要であると実感した。

個の変容からも、グループワークによって取組を行い、教員がファシリテーターとして授業を進めていくことは有効であったと考える。

表9 4つの能力要素に関する自己評価
（肯定的評価5⇔否定的評価1）

	授業前	授業後
発信力	3	4
傾聴力	2	3
柔軟性	3	4
状況把握力	3	3
平均	2.75	3.5

表 10 心理尺度 KiSS-18
（肯定的評価5⇔否定的評価1、18 項目の合計点）

	授業前	授業後
合計得点	40	53

ウ　成果と課題

(ｱ)　成果

生徒の感想やアンケート、心理尺度 KiSS-18 の結果や個の変容等から、クリエイティブ・シンキングの思考法を促す手法を利用して課題解決学習などのグループワーク活動を行うことや、ファシリテーターとして教員が指導に当たることは、社会人基礎力のチームで働く力の中の発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力の４つの能力要素の育成に効果があったと考える。特に、クリエイティブ・シンキングの手法であるブレーンストーミングやブレーンライティングは、どんな意見も否定されない雰囲気の中、自由に考えを述べることや、他者の考えを肯定的に受け入れることを基本として話し合いを深めていくため、発信力と傾聴力の育成には大変効果的であると感じた。また、教員がファシリテーターとして生徒の主体性を重視した指導に当たることによって、生徒同士がより積極的にコミュニケーションを深めながら活動に取り組む姿勢が求められる。そのような授業を重ねていくことで、自分のことだけでなく、チームのメンバーや他チームの考えや思いを積極的に理解しようとする態度が育成され、柔軟性や状況把握力の育成にも良い効果があると考える。

(ｲ)　課題

学校現場において実践するに当たっては、各学校の現状等に応じた全体計画との関連性を踏まえたうえで、社会人基礎力すべての能力に関する具体的な指導計画を作成し、他学年においても検証を行う必要がある。その際は、集団における自身の在り方や他者との関係性を整理するために、授業ごとに振り返りの時間を十分に取るよう配慮したい。また、実態として把握しづらい能力の伸長を、より客観的に測ることのできる分析方法を考察することも課題である。

5　おわりに

検証授業では、社会人基礎力の中でも「チームで働く力」に分類されている発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力の育成を目指し、取組を実践した。最後の授業で生徒が書いた感想には、「自分の意見を述べられるようになってよかった」、「他人の意見を受け入れられるようになった」、「考えるのが楽しかった」、「チームで協力してできたので楽しかった」など、肯定的なコメントが多く書かれていた。また、チームで活動することについて「意見の違う人たちが一つの意見になるのはすごく難しい」な

ど、他者と協働することの難しさや大変さを学んだことが分かる意見があった。友達の発言を聴き、「人のアイディアを聞いてみて、自分と違うものがあっておもしろかった」など、自分にはない考え方を知ることに関心を持った生徒もいた。これらの感想から、本授業を通じて、生徒自身に様々な「気付き」があったことを大変うれしく感じるとともに、他者と関わり合う際に必要な力は、やはり人と人との間で育っていくものであることを再認識した。生徒が少しずつ変わっていく様子や、自己評価の結果からも、こういった活動を重ねていくことは、生徒の能力の育成に有効であると実感した。

今後は、検証授業を通じて得ることのできた課題の改善に向けて、学校の現状を十分に把握した上で、他の様々な活動との関連性に配慮しながら、より効果的に生徒の能力を高めることのできる取組を考案し、実践、改善を重ねていきたいと考えている。そして、社会人基礎力の育成を目指した取組について、学校現場に理解を求めていきたいと考える。

＊掲載物使用承諾済

【参考・引用文献】

・上田健作『高大連携による総合学習プログラムの開発―自律創造型総合学習プログラムの開発― 研究成果報告書』2010

・経済産業省「社会人基礎力に関する研究会―『中間取りまとめ』―」2006

・松林博文『創造的発想力を鍛える 20 のツールとヒント　クリエイティブ・シンキング』ダイヤモンド社、2003

・堀洋道他『心理尺度ファイル　人間と社会を測る』垣内出版、2000

・経済産業省『社会人基礎力　育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために』河合塾、2009

・経済産業省『社会人基礎力の育成と評価―将来のニッポンを支える若者があふれ出す！―』角川学芸出版、2008

・中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）」2010

・経済産業省『「社会人基礎力」育成のススメ―社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して―』2007

・国立教育政策研究所生徒指導研究センター「『キャリア教育』資料集」2009